121.51
V. k

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k

ガラス使用

121.51
k

原序

我國六經の流布せし事久しといへども學者皆文字言句は上にのみかゝはりて眞意をさとる人世にすくなし しかるに小松の重盛秩父の重忠青砥藤總楠正成正行細川常久等の如きは日東の君子人なり常に五常を重んじ人倫を正し忠孝の實のをよひても世はるかに時さりたれはしく濂洛關閩の学有事なきをもいまた

國立國會圖書館藏書
国立国会
26.9.10
図書館
245256
国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k
ガラス使用

遺恨にあらんや近世惺高先生藤歛夫出
て濂洛関閩の學を聞きて悦ひ古学の
失を正し給ふ故に世の学者宋学の
風を慕ひしかとも其門徒小人斗筲の
多くして真儒の統を得人なかりき其吾か
藤樹先生も布衣より出たまひ佛老の
俗学を出て王陽明の遺書を得て大に
悟る處ありて終に心を正し身を修めて
天の徳器凡俗にこへたまふ故に学文字

言語に屈伏せしは専ら心を治めさせ玉ふ
故に学者是を心学といへり夫王陽明の
学も良知を本とし子朱子の学は究理を
要とし玉ふ其おもむき異なるに似たれと
いつれ良知も究理を離るゝ事なく究理も
良知の外にあらねは皆身を修め心を
正しくて共に聖果を結ひ人為なれとも何そ
彼是の別あらんや其上子朱子も学知
の聖者にして其学至大至廣至中至正

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k

ガラス使用

學者其外俗風をあまく者も仁義道德の
實行なきる故なれは彼駟馬に乘し冠冕を
かむれは國家の權をとりて一時の富にほこれ
といへとも其人死去ての後誰々の其名を
となへくそれは跡は墓もんやすし草木の
落枯におなし誠不以富亦祇以異と
聖人の戒め給ふ理なれは今先生にあらて
されは然れとも先生も日本の大賢君子
といふとも此れもなきを實にすきまかの名と

きこゆ乎あまく先生の遺書をえらみん
同志尚着外書也是なかるところなと其理の
益明になるるは覺ふ惜乎此書を知まる
人のまくなきまにては依く謄寫して無文
まき人の高きたの係る助めの如しされを
名付て學書解集としふ誠に高名の
そしる變ちなんをさとのうたいとゆ有
らはれやと筆を止るのみにさんを

序中有心學書翰集之名序後無作者署名一不審誰製作而外篇故前稚大納言公音公自題曰江氏書簡一安禪佛寺藏本無此序一單題曰不時翰一題名各異姑存其舊云

江氏書簡目録

卷上

卷中西常慶書　一通

卷佃叔一書　九通

卷清水子書　二通

卷谷川子書　三通

卷森村子書　五通

卷中

卷岡村子書　六通

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k

ガラス使用

送岡村子書　壹通
答西川季格書　壹通
與横山子書　壹通
與土肥子書　壹通
答田邉子書　二通
答山田子書　五通
答國領子書　壹通
答早藤子書　壹通
答中村子書　二通

卷下

答中川貞良老母書　壹通
答淵源誠書　壹通
與吉田子書　二通
答淺野子書　壹通
與熊澤子書　壹通
答一尾子書　二通
答垂井子書　壹通
送中川子書　壹通

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k

ガラス使用

送神山子書　壹通
送戸田子書　壹通
附載
偶吟　九首

江氏書簡目録　畢

交修塾藏板

江氏書簡巻上

答中西常慶書

御病氣再發今程遠と御快気之旨何
ゟ以珍重々々不申及候得共寒中之
御保養專一ニ存候内經ニ所謂恬憺虚無
真気從之精神内守病安從来飲食有
節起居有常不妄作勞此保養之本
領即大學之格物致知之工夫ニ而御坐い

上古天真論篇

念慮之往来憧々者禅家謂之葛藤

為一身主宰之主人禅家套語

性命合一之處能々御体認御受用所希候

一 心法取入候も難成御坐候旨旧習之葛藤叢

敷漫ニ纏リ申故ニ而静坐ハ當地ニ而切磋

琢磨の功浅く葛藤抜切拂ふ鎌之刃

されとも能々磨き立なくはすく左程ニ

静坐は半日も須臾も静嘩申出来き存養

之法は合點よく致候ハハ本来固有之

主人公ニ事へ申事よ至つて易簡明白成

り然而静坐ハ或ハ頑空ニ入或ハ掉ニはしる

の病而已ニ而御暮し被成候旨存養せんと

思召念を発し其念上まて支撐被成候

故静忘れ来き中ハ掉みより静定まりの時ハ

頑空ニ入候ニ不覚はなるかと識仁篇必有

事焉而勿正心勿忘勿助長未嘗致纖毫

之力此其存之之道若存得便合有得之一

段能々玩味可被成候現在當下之心欲く不

動物々不滞慈愛恭敬温々惺々坦々蕩々

成心良知之本体ニ而候此本体を其まま存

養被成候ハ満腔子惻隠之心而已是ゟ
存し失ふまじきと念を發て此本体を
主人公と定んと工夫被成候ハ其一念と
また意必之病と成ル此處ニ乱て心得
易き事ニ候共旧習之葛藤切拂不盡間
ハ百倍之功被不勤ハ會得難成候ニ
可被入御情候

一 御親父様へ御事被成候刻決くさこつ立
中肯此妄心ハ是非の素定好悪之執滞ニ

而ル親の非を見付ル所より起り申ル此病根
を能見所本来是とする所なく非とする
處なく好所なく悪所なく真是真非真
好真悪ハ臨事感慮之心有事を能辨へ
此釼まて彼くせも被の根を御切捨孝悌
論ニ所謂大舜視瞽瞍便是至神至聖至
仁至慈的と云る理味を能御吞込可被成候
瞽瞍ハ子を殺さんとする深き被人なれハ
萬まとくめるよ而已可有之ル得共大舜ハ

是ならぬ謙め玉ふ事露もなく只一向に
自己心上之至徳を明らかにし給ふのみ
是則学術ニ所謂自反慎獨ニ而御坐候
如何様親ニ事る時節自反慎獨之功手
之下し易き所ニ而は若此ニ於て墮落致
候ハヽ萬境皆墮落而已ニ御坐候半哉
角手之下し易き所ニ而御受用御勵ミ可被成候
一當境ニ而之安楽其元ニ而ハ御失ひ被成候由
境界之安楽之つまて御坐候我境界乃
安楽を俗楽まて御坐候ハ君子の安楽の本体
ハ吾人方寸之内ニ常住不変のものにて
假令ハ雲行雨施し雷電震動の時も
白日青天ハ少も變る所無御坐候人々
心裏の白日青天安楽の本体ニ而微塵も
何の境界まて喜怒哀楽如何時も中庸の
本体ハ少も変するものなれは此所能々
御体認幸甚〻〻

一本輯之
答佃叔一書

忍之字の御受用未熟ニ而人之犯を堪忍難
成よしそれは忍の字の用ひ様悪敷故に
てん人の犯時ハ孟子の自反を用ひ候る
ニ能候坐候人の犯時ハ我彼を愛敬する
仁禮ニ叶ふりや否さぬくを彼犯をまし
きと自反して我に悪悔の兆あらは彼ニの
犯すを尤と得心すれも自らさのみ怒気
無候坐候若又我よ悪悔の兆なくきも
犯ハ我愛敬忠信なき故と自反すれハ候の
立不申候若又忠信ニ愛敬すれとも彼猶犯
時彼狂氣ニ酔狂人の妄行のごと狂氣酔
狂人ニハ世人さへかまいぬものにて候得と志
有もの勿論の事逆立不申候如斯心得ハ
難忍事もなく胸中常に涼しきものにて
御坐候孟子の自反之説を一貼の清涼散
なりと先儒の發明ニ而候此意ハ胸のさわれ
熱なる病を治する薬方を清涼散と云意
念の邪火ニ而胸中臭き熱するを治するハ

245256

右自反して清涼散なりとなす事能く体認
可有事
一 善悪二念のうち愛敬中和の本心なるは善にて
愛敬中和を離背たる悪とす心愛敬中和に背
時は假一旦楽しき様に覚ても其心逆境或紛
乱閙熱の境に逢ふへは苦痛甚敷物なれは是を
苦楽と名附て楽しみに似たる苦也愛敬
中和の心を認て不離は順境無疆を元とす
楽み逆境閙熱にも又楽しむりのふくむ故に

245256

君子は坦蕩々也と孔子も発明し玉ふ人間
に楽なる好まぬ者をなくして其真楽の端的
を不知故に求る事不克此意を辨へ善
心を楽み悪念は苦と能体認すれは邪念自
ら除易かるへし
一 色念邪成を後日の患禍なる能分別して考
まして其患災を恐るゝ心忍字の釼と成て
切捨易は能其得心可之成は楊貴妃なりとも
後ろだ釼戟なるかまへある人と色欲の火消て

中ニハ能〻御体認惣而心志痛ミ自欺ニ起り
自欺ハ獨を不慎故〻自反ニ而浮躁の心気
相鎮め愛敬中和の獨を能見付て慎ミ不離
様ニ工夫仕候ハヽ何の病も自ら治する物ニ而
能〻御体認御不審共重て可被仰越候

又

愛敬中和の獨御見付難被成候ハ旨御体認乃
誤ニ而候ハ欲ニ不動物ニ不滞時の心を能観察有
度候ハ此時の心氣乃象温和慈愛恭敬惺〻

成ものニ而候此心則愛敬中和の獨ニ而候此獨
を能御見付候て常〻慎守視聴言動行住
坐臥茶裏飯裏皆此主人の下知ニ順ひぬる
を慎獨之工夫と名つくかく受用候ハヽも
取認出る工夫ニ而ハ此主人公を分明ニは得も
ソリまい候逆境對候ともおそく驕奢毛頭
無之候

一 御母公へ御事ハ時和厚の心なく却而窒
碍有之ハ旨是ハ心のすなをならぬ故ニ而候

本成心ハ活潑流行無典要無格式和豫圓通
成りのまゝにては知識開け情欲起り初てより
以來色々の習ニ染り格式典要其外世間に
万事萬物ニ就て好悪の執滞是非之素
定方寸々集り凝りて圓通和豫活潑周
流之心氣すくみて主角胸に塞りゐるを
凡心と名つく如此痊る凡心を御袋抔へ
御事に成ル故胸中之主角声ニ發し色に顕ハ
故々慈母なりとハいへ共其主角之障必報有之

依て弥無和享有窒碍抔々御覚へに種々の
痊を放下して孩提の心ニ於方寸ニ明らん
去く御事にへとも自ら和豫圓通之本然色々
顕も聲に發しえより慈母なれハ其孩
提之和豫ニ答て温氣弥増和享胸に満に
半ます々露も窒碍覚へ御坐有間しく候
此本認急々如律令

又

色々之妨御坐ル而御退屈ニ成ル旨自反慎

獨也工夫手ニ不入故ニ而ハ唐心ニ痓有之候
ニ付外物碍り氣の毒ニ覚へ候故いろとなく未
然奪ハれ候心ニ痓なく候ハヽ世間萬事万
端少しも障り有る無之候殊ニ交所の善
悪是非ハ少し構ニ成不申儀ニ而ハ自又
慎獨之工夫ハ心の痓を融し捨候へハ廣々
として天地万物を容て窒さる本体を不失
様仕候事專一ニ而候大学ニ心廣体胖ありと
御坐候ニ而能ニ御合點可被成候吾人之心
本来廣大ニして碍所なきものニ而候然シ形の
程より之習ニ染り是非の素定好悪の執滞
名利乃欲形気の便利なとを以て捨ち硬く
痓候故親の我を愛する事まく多分障罷
逆立候得も自余の事ハ不及中候此痓を解心
得なくしては学問ニ而却て痓をかさぬるもの
ニ而候能ニ御体認ありて痓然唐解候ハヽ何事も
窒へ中間數万事の窒候ハ他人の非ハ無之ハ
皆我心ニ痓有之非有故ニ而候さればこそ抓り狸も

又ハ天狗にばかされなどゝ申すべき縁無人ニ無之
形無る事ゆへしかと論ニ及ばざる事
縁なる人ハ皆其身の為なれば世間の人ハ
我心の主張ニよりて魔とも成り又ハ父兄
師友とも成ものニて候世間の魔障をなさん
魔縁なき様に御心得肝要ニて候其魔
縁ハ右申心の疵ニて候是御目ニかゝり候事令
申候ハ合点すいかう候ハヾ重而可申候

又

一本無之

小川子へ之儀心得候ハ兎角其身学術ニ
疎く成故人を取立申さず疎く成るゆへなり
兎角一念獨知之處明らかに顕るゝ物ニて候
大学ニ申ニ誠有て外に顕るとは此事ニて候

又

色念起り勝ニて悩心悩ニは由壮年之通病
ニて候ハ色をも見ずしてハ此の魔障碍を去候
時ハ色念不起時ハ心相但ゝ滞ニ不して
命門の火下り腎水堅く閉て形体康健

なる事を考へ色念發る時ハ淫慾の執氣
心肺を薫する故に心氣浮躁胸中懊憹小腹
脹急小便淋滴百病是よりおこり心浮き
おちつかざる物なれバ此二の苦楽損益の對
等の符を用ひバ魔障次第に退散する
者なれバ扨又色を見て不義の色念發する
時も淫乱眼前の害将来の報ひ欲をとげ
て後常に可悔苦と欲をとぐる楽み暫時
の事にて何の益もなき事を對等して

色魔をはらひ退散成安き物なれバ
其上犬枕に交會の後側に置ともなきとなん
以ておだしく精の不泄うちをも離ともなく
して暴しき意精泄をく後怨ち變して
側に近く置とりあつかひぬれバ本来
色欲ある慾火炎上して氣みちたる後さく
らめきたる魍魎なれども羞悪の大陽照し
玉ひて容易く消うせぬべし彼淫魔氣の
乱れる事をよく知へなる其念放下可

為容易ㇾ

又

同志議論之砌を快く獨坐の時力なく邪念
指出て懶勝に御覚ㇾ吉苑角本体を認知
工夫なく徒ㇾ議論發明の格言を認て心地
御痊ㇾ故ㇾ学問之工夫ハ本体認知を第一
義と然故ㇾ大学ㇾ知止を掲て工夫第一義ㇾ
示ㇾ給ひぬ本来吾人ハ本心安楽ㇾ
力強く獨坐人ㇾ交の無隔ㇾも明快通
達ㇾ力強く無懶怠ㇾよりㇾ心苦敷
力ㇾまゝㇾ後来の習心習氣の祟ㇾ坐ㇾ
能惑を辨ㇾ習心習氣の汚を洗清ㇾ得ㇾ
生ㇾ附ㇾ本心頭ㇾ大安楽の實体ㇾ立帰
ㇾ動靜語默何ㇾも中有ㇾ邪念
雜念ハ習心習氣ㇾ妄動ㇾ
天君恭然ㇾ除去ㇾ
志ㇾ
実理を

不立故ニ候へハ譬ハ食の飢を養ひ湯の渇を
止る事ハ能ふへしされハ飢渇ある人只飲食
ニ而已志て他念なく飲食を得されも
其志すたまさるごとし吾人の惑へるも
飢渇のごとし明徳の惑の苦ミを止るは飲
食ある餞渇の苦を救ふのごとし如此能ふへし
明徳を求得て昏昧の苦を拔んと御志ニて
明徳を不得中ハ志少しも懈る事なしも
森村氏一作 次右衛門 中川氏一作
有間敷候知止の工夫書中ニ難申盡候森村氏

権左衛門
中川氏林ニ對談講習能御体認可為大幸
候猶御疑候ハゝ可被仰下候
一本無之
おもひいてまゐらせしものゝ人よりも
ありとはうちぬれまさりなれ
又
講論之御心相惺々湯々御覚へ候得共程なく
御取失ひ候儀体察のあるまき故なく候
講論之提撕ニ而意念の交除候故心氣
惺々蕩々ニ而候得共此時此惺々蕩しれ

根源を能体察して意念の交形し純一
無雑成故こ如此なると弁へ惺こ蕩この
氣象を不認其根源なる純一無雑の良知の
誠を御認知られ存難の力可有御坐ハ
根源を不認して徒ニ觸發の氣象而已を
御認ゟ故ニ工夫要なく影を候のむきとらん
候覚ゟるゟ能候体認幸甚こ

又

御受用底不親切吉莵角種こ適莫の挽雑
不除故ゟ葛藤の不除ハ本体を知る事
不明對等見解等の心得底ニ不徹故ゟ
学庸論語の抄を熟讀被成御講論ゟて
進修之益可有候坐ハ外物ニひかされ候
我心ニ有之て外物ニ答を無候坐ハ俗ニ
被移も俗こ答ハ無く我心ニ候迄能く候
自反被成心上の意魔を御除られ天下に
崇をなすもの候迄有間敷ハ

又

御志の立候有増候合点参候由先一段之
事ニ候有事無之心二ツニ候覚へ候を見
解對筭等底ニ徹せず外に顧意念清
く不盡故ニ而御坐候俗ニ交て不快奉公ニ
退屈ニ成候ハ本体の仁愛くらき故ニて候
本体のくらきを外ニ願ニ而意念清く不盡
故ニ候菟角見解對算等の工夫底ニ徹し
申様ニ御励可被成候

答清水子書

御受用底放心収斂せらるゝ事に皆止を知らるゝ段
との儀候右に候白人顧外意念ゟ全放下して
全躰精神内ニ守りけりても工夫取入
かつき物にては全非不放下終ニ難湊泊
と朱子の所謂此心にては全放下も事ニハ
非ず一念入微上に於て意根ゟ断除
まゐる而已意念の精微せらるゝ由意ハ心ゟ
所倚ある天下のことに於て有適有莫是
我意と名つく論語所謂意必固我皆意ニ

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k
ガラス使用

てハ大学の意と論治の意と二義なし
誠ハ良知の本体意必固我を格し去る良
知の誠に帰を意が誠なりとすハ大学の八
條目に説下處の文勢も格致即誠意ま
工夫格致之外誠意の工夫なくハ此處明
辨肝要にハ此書中能〻御讀候て其後
中川氏と御議論被成ら御合点可参ハ

又

旧習に御章勝（ヒカレ）ち由如仰道が見ぬ事の

不親切故までハ風俗を氣毒に思召旨不
入御さし出事ニハ気の毒に思召風俗と
一体成處御心に伏蔵して御坐ハに付左様
於外による心頭までハ風俗が欲敷思召も
よき心上の御悔りて慎得の力出来可申ハ

一 或人の境遇於御自論候右に存ハ乍去銀の
崇ふても無御坐候銀を求め過当候崇
みく候半ん

（或人一本作仁右衛門藤右衛門）

（一本輯之）

與谷川寅書

學術之要掛物ゝと存望之由ニ候此度も
持病細ゝ差起り心地悪敷ニ故書不進候
掛物ゝ不及存事ニ候工夫の主意ハ格物致知ニ
而ハ格致之要も慎独ニ而ハ格ハ正也物ハ事也
貌言視聴思の五事也致ハ至也知ハ良知也
貌言視聴思は道ニかなふ所を正しく
良知の本体ニ至り順ふを格物致知と申候
故物をたゝすも致知なり知ニ致るハ格物也
畢竟貌言視思は五事良知を不離良知

常ニ明ニ成様にする工夫ニ候然る故ニ
傳ニハ慎独の二字に約り申候良知も
実体愛親敬親の心是なり此中和は
愛敬を常に一身の主宰と定る様ニ
工夫尤ニ存ハ愛親敬親と云つもとゝく
平生親を思ひ出して愛敬せよと申も
あらん赤子は愛親敬親をする處の愛
敬を天性乃真情なるに依て是を指て中
和の愛敬を示し給ふなれはなり人欲の

愛敬に混乱せる事なく慮玉へは成居し
赤子の愛敬を体認して今我心常に
明〻成様に在なり此心を即ち仁と名く
此心無欲なり此心清淨なり是れこそ活
窒碍なし此心偏僻なし過不及なし此心
苦悩なし此心好悪の執滞なし是非の
素定なし是故心習なし名を好むなく
此心終始なく生死なし此心常に安楽
なるものなれは此なく能体認有へく候

一 愛敬之御不審得其意存候寛裕温柔成
心是仁愛感通せさる時の気象怵惕惻隠
是仁愛の感通せる時は氣象の寂感は時
乃違ひにて惻隠と寛裕とを出れしき仁
愛すてに是故心倚依なく常に内に有る
發顕せさる故に中と名つく此心乖戾な
らさて温和なく物に觸て節に中り不背
故和と名はく節を外にある作中則
節なり仁愛の惺〻と収斂して一物を不

離を敬と名つく中和の外に愛敬なく
愛敬の外に中和なし此心体認致さるゝ
所に依て或ハ赤子の心を以て示し或ハ井ニ
入赤子を見る時の心を以て示し或ハ孩
提の時の心なとを以て表示し給ふ事あれ
人ゝ明らかなる處にて件の仁を認て
不失なる明徳といひ止於至善といひ致知と
云ひ慎獨といふ能ゝ御体認多幸ゝゝ

又

八幡濱にて御迷惑之由さりとてはおすき痓（スクミ）
ニ而御坐候自己心上の邪なる能去り他人の
不禮不義なとを御かまひ有間敷候海を
海を恐よ我を忘るなとの心持肝要ニ候
坐敷なりと候とて然し之由大方ハ能く
候ハゝ其上に自己心上の獨を御慎ミ可有候
昔程明道伊川兄弟共ニ酒宴の坐ニ御座候
時酒の挨拶ニ遊女出て謡ひ舞之ハ伊川
も坐を立破り御帰ありしも明道ハ其まゝ

ませりて酒宴の事終りて坐中の人こと
一度ニ帰り其翌日明道伊川ニ對面ある
折節伊川ハ昨日の遊女を嫌ひあまれ
ある心解さる顔色穏ならさるを明道の
曰昨日坐中に遊女ありしとも我心に遊女
なかりき今日坐中に遊女なけれとも其方に
ありしなん遊女有と戒め給ひき伊川も
不及處と嘆し給ひきとなむ是まてく
能御体認懇して彼宇右衛門に不限誰にても

向ふ人に目なき所ある悪敷は只自反慎獨の
心にて我向きを可慮答程を能考へて慮
答して向ふ我を悦と不悦とハ構ハぬやうには

一 工風間斷而巳多く同志會合は時節を
心も健かに清くは候とも俗に交る故獨坐の
時も心も弱くもそくと汚ハ敷御入之
由兎角本体の見解なく忠信を主と
する取入まて故是まては同志會合之時健
かに清き躍朱を陽氣の發散まて本体剛

健潔静ニて無御坐候故ニ俗ニ交るの樗坐
の時陰気ある事を用ひて柔弱昏暗ニ候
一陰一陽の中剛健潔静の本体ニて候へハ
夫を能御見付候而一心の主宰とこ被成候
被御越候ハ、とく成病も自らちゞまきめ候
然ハ是を忠信を主とすへきと存候

又

一本作小川氏

讀書なとも第二ニ被成心裡の良知を能
御体認御右候ハ讀書も本来吾人心性の
註解ニハあらぬ注解被讀候本経を明らめも
為あり巳ヵ良知を不見付して徒ニ経書
被究るハ譬ハ本経の文字讀被不知して
徒に註解の訓詁を講究させるが如しかく
ぞて本経を會得しある人も古来ヵ例て是
あきるのハ本体を認候ずして工夫を勵
ますを古人空鐺(カラナベ)を煮(ニル)と戒めしきハよく
御体認力を本体の上ニ御用ひ候ハヽ多幸々々

答森村子書

先止と中とは二言は筌蹄とし我心の
本体を慎思明辨し常に是を用て主人
公と定め無事の時も此天則を以て意
念の伏蔵を探り尋ね退治して鑑空衡平
の体領にかへり有事の時も此天則を以て
境に応して發見する意念を省察克治
悉く坦蕩に此体領にかへれは無事有事
意念を省察克治して本体を存養
し常に中和に不離を格致の要領とす

一本輯之

又

学問工夫万事主意頭脳御坐候主意頭
脳とは我心の安宅とし眼目とし標的
とするは要なる中は故に利欲名誉を以て
主意頭脳とする時は万事万物皆利欲
名誉に非るなくは故学者あれは明徳
を明らかにするを以て主意頭脳とする事
肝要なり明徳を明らか成るを以て主
意頭脳とする時は工夫はするも立と

居るも食するも主親に事も明友に
交るも其外應る接物皆往として明徳
を明らかにするに非といふことなし如此主意
を立戒懼慎獨の工夫を盡す時ハ何事の
境に移されは宜哉若主意頭脳なくして
書を讀んも或滞て却而心の煩になり
或ハ又人の為と成行事の扱戒懼を常
に心の惺々としても寂然不動の体に帰する
なる則慎獨と云ハ其邪意起る時ハ則

吟味して克去をいふなり譬戒懼ハ抱関
の如とし善念の出入する時をも其まゝ通し
悪念の出入せんとする時ハ関吏吟味して邪を
閉き善を存ハ然る時も慎獨ハ関吏
ニ而御坐候常に心を惺々と提撕し悪とも
不思善なれも不思能くは然る時ハ中和体明
叉なりやは善にても強て工夫思索すれハ
中和の体にならん病を常に果て改むと
するも餘ハは渇共是も用ひ捨ありなれち

中和ま肯要有之は思ひ常惺々と心ぶ掛
邪念の起る時も克去り專一には将又衆人ふ
交り同志に交るとも心持違ひはい一貫にて
無事坐は惟一にても無御座心上にて惺々
と仕度時も毛頭の好悪なき様に存候
御体察多幸

又

心法の取入難成由定而心外に性を求る迷え
此半と存候吾人現在の心欲ふ不動物に不
滞とられ温和慈愛恭敬惺々底の心即本心
の実体にてそれ此性を見付て慎守り視聴言
動行住坐臥應する接物一切の境に對して
不取失主人公と崇順を主忠信と申候
然るに吾人現在如此の心本心の実体なれ
得共初学の時も此心於中に習邪欲と氣
の濁駁と混雑して其色な不顕ふとし
譬へ丁銀の中に銅鉛の混雑して其色を
不顕ふごとし境に不對時い氣機不動して

伏蔵する故ニ其氣象あらわれ故ニ混雑
伏蔵の邪魔清く不盡中ち本心の正真とし
申からは絲まとも此心を工夫種子主人公
と定めはしては空鐺を煮、淇ある故ニ先此
心を認て主人とし鍛錬の火候よく心得
視聴言動行住坐臥茶裏飯裏應する接
物の時ニ習心習氣情欲の銅鉛を吹探る
り能は此工夫即自反慎獨ニ而は

又

心術病痛の御書付得其意申候意念の凝
滞御坐候故念發る時ハ意必崇をなし故ニ
支撐ニ入念不起時ハ頑空ニ入る皆初学の
通病ニ候見解對筭を以て心地を廓清し
適莫意必の根を裁断仕候へハ本体呈露
格致の功手ニ下し易く御坐候

又

工夫間断多く御取入かね申旨間断ても初
学の習ニ而候へも不苦候只実体の見付ち

きゝ大要ゟ学問の病まて御坐候先書
にも申通のごとく現在の心欲に不動物に
不滞時受敬底ある心を主人と御定め
常ゝ不失様に可被成候此工夫のまゝり
ごん能御心得られ自らゝ日新之功可有
御座候菟角面上に申可兼候

江氏書簡巻上終

江氏書簡巻中

交修塾蔵板

答岡村子書

進修の功御励候而も工夫實落ある迄まて
其身の天命かと是以大成心得損に而は
譬嚴牆の下に立て死すとも天命と心
得而違同前に候工夫嚴密に用ひて徳に
進まぬと云天命ハ無御坐候只工夫未
不足故と可被思召候世俗あやかし

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k
ガラス使用

なと云へる人品ハ道乃受用成ましく候
其外の人ゝ此道ぬ受用なしぬものを
無覚束ん明徳を明らんせむと思ふ気なき
ものと明らんする道筋を不知人ハ猶
此二品ハ誠ニ徳ニ進ミ不能人ニ而は能同志
中議論体認所希候

又

御志うすらぎ空まて自反慎独受用手ニ
不入故何ぞの時主翁ニ御對面有へきとも
不覚退屈ニ思食旨本心ハ余り向上神奇
玄妙ニ心得過て現在の心ハ外ニ御求有誤
りては現在の心乃裏面ニ常住不易の天君
恭然として御坐は事ハ信し不神の神
不妙の妙真実の神妙成事ハ心得学
術ニ所謂題目之中ソ川まふても御心ふ
叶ひ候門戸として本心の堂ゝ昇り天
君ニ御目見へ可有候御目見の後一言一動
此君之御下知ニ随ふ工夫御勤なくソつ

なく浮氣も静り躁念も靜に成萬事
の顛倒日〻に能辨へ五官其職を盡し
天君安穏に可有之候御体認幸甚〻〻

又

心喪之儀御尤に奉存候今の風俗の中に
而御執行可被成御事大略有増ハ書
付進之候養子に参り候者本生の父母
なからも其の喪にて御座候心喪も其間
と可被思食候

一 喪之中ハ色欲ハ勿論絶申すまし食物も
肉色其外何にても厚味のものは忌申候
法まてハなくとも今の俗まて右様を成候
事ハ常にも何となく人の目に立不申様に
厚味のものは成まゐらぬやうに被成御慎
み満心の所ハ相振る舞ハまじく候不適
坐敷まてハ何にても可参候其内何となく
目に不立様にするか可然候

一 何事にても謡舞悦ひ騒く所をはなれ候

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k
ガラス使用

一可被成元より謡なと御歌ひ候て慰可
被成候は淫舞の坐敷にても不遁様子に候ハゝ
其侭御坐候而も心の哀戚を御失ひなき様に
可被成候淫舞の所を慰よ事にとくも
何とかく角のなき様に慰ことて能し
扨尤なれは右ハ外様の情にて慰申候心喪乃
本意を心の悲みを被忘させ給ひ候事一年
仕は隣の座坐は時を以申により静なる
ところへ静坐可被成候は母の胎内に宿りし

より二ツ三ツまての母の苦身の恩愛の恩
なと情くくと思召孩提より此かた習ひ
染る心共被除き去て赤子孩提の時乃
心此中に有と能御体認赤子孩提愛敬の
心を感して哀戚の誠有りて心喪被眼目
学問の急務ニ而御坐は此所を能く御
懈怠なき様に可被成候
一先祖父母の鬼神（一本ニ社ニ作）此条ても色々六ケ敷
候ものとも候へ共殊に今の俗は中にて執

行かゝりきつすも御座候是ハ外様の格法の
事ニて御座候祭り候本意ハ孝徳の誠敬
を第一ニ仕候間備へ候ものゝ多少を先格ニ依候
其宗門の作法を用候膳をすゝむる時手
もる時ニ如在の誠敬孝心を御尽しさ
せ候ハ祭り候前日より能潔斎を可被成候
祭祀の格法なとも貴面ニてハ委細申尽
し候先第一ケ儀の誠敬を御尽し可被成候

又

御在江戸御苦労御大儀共ニ存候去
大禹治水の艱難ニも似も似める事ニ候
修便利を覓ふ意念を放下して良
知ニ致る力を御励可被成候如仰紛擾
之中把柄手を離れ易きものニ候
別て存養の功御励可被成候

又

志さへ無間断して終ニ御取入可在候
とかく御積り御尤奉存候昔枯木を三年

拜し奉れ花咲なとや傳へ候は是ハ枯
木の実まてハ無御坐候信心の実妙にて
花咲候は左候へは此道の志しも真実に
厚く候て取入疑候有間敷候去なから
只うちの空に志を御頼候ハ分なれとも
花の咲つき枯木有間敷候常にや進候
ならく先現在の心欲に不動物に不滞時
温和慈愛底恭敬惺に底の添を御見
立候而此心を信仰して常に不失様に工夫成候

此工夫無間断より御取入程有間敷候
如仰掛御目度物語や義度候

又

外の願を全放下して方寸静不乱候ニ
御受用専一ニ候其邊名誉驕楽の抵多
有之由御尤のなれなき様御尤候帝舜
四言の心法彼抵ニはなれさる無上の護
身法ニは無懈怠心上ニ御ときあるへく可有候

送岡村子書

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k
ガラス使用

岡村子仕途ニ奔走して啓居ニ暇なしと
雖とも其志篤ニ依て遠く来りて其
憤を發し講論日を重ぬ其及帰去其
要領を序て居学の一功を希ふ如左
岡村子問云師に煩ひ友に交て講する時
ハ豁發親切にして万欲全放下ニ似たりと
いへとも應接の境に對しては揺き易く
奪れ易ふして良知に致り難きハ如何曰名
利旧習ハ吾人の熟所なれハ其根深其汚

染厚し故ニ一旦良知の灵照ニ依て昏迷
なきかことく成といへとも久敷馴たる
外誘に對する時ハ縁にひかれて倶に棄し
て心くらみ氣乱れて熟所の故態ニ陥りて
とぬやきれを言葉乃僻さくらく心を
用ひすんハ正に帰らし况や心髄ニ伏蔵
凝滞したるものをや困勉百倍の功を
用る處都て這裏ニ在ぬ然るを吾人困
勉の功を不用徒ニ時習の悦を希ひ欲速

まく正助の利心を換雑して進修乃艱
難を患ひ氣質の極めて淵駁なる故に
文才の拙き故に学術の真に非る故に心
妄に疑惑を生じて自家の工夫厳密武毅
ならざる迷ひにて答の己に有るを不辨
初学は時困勉の功を不用して聖域に
入らんとすれば顔子も不及處也況其下なる
者をや尤反求まつとしからは大学誠
意の傳瑟僩を以て切磋の眼目とし中庸

に困勉百倍の功を以て換骨乃奥方を示し
玉ふ其意能可看得也是を農業にたと
ゆれば困勉百倍の功は耕耘の艱難苦労なり
時習の悦も得所の秋実なれば困勉の功なく
悦び得んと思ふるは稼穡の形やみなくて
秋実を得むとするに惑なり蓋初学の士
良知を安身立命の地と定め厳密に
心ばえく勇猛に己に克去て一毫も艱難
苦労を不可憚己に克當ては其身命も不

可顧惜況其他の小利害をや所謂殺身
成仁の儀也如此嚴密武毅に力を用ひて
克去りがたき人欲有るなんや人欲に克
易時ハ致知の功実落有て困勉変して
易簡平和となりぬ且初学の時ハ嚴密武
毅に力を用ひざれバ其時として墮落なき
ことはあらん必其墮落ハ不可咎只幾度
も提撕奮覚して成徳を期待すべし假
初にも欲速正助の念ハ不可起是の初学入德

の門宜体察明辨受用岡村子問曰應接乃
時にハ良知の發見辨易省察克治の功手
ばや下しがたからん無事の静坐思慮なき時を
良知の体認難き故に守らむとすれバ支
撐に入ぬ支撐を離んとして不守となれバ
頑空になりて著実下手の図方なきを
如何曰是もまた初学の通病誠に切なる
問なり支撐ハ玄妙高遠を好む惑なく
氣象の意味ハ認て守る病なり頑空

と放心のうかれて念なき時也此病静坐
思慮ある時は崇をなすのみ而已にあらず
應接の時外誘に揺奪されて堕落
勝なるも此病魔の崇なり蓋應接ある
事ある時と無事の静坐の時と本末工夫に
二條なしいかんとなれば應接の境なりとも
思慮なき時も存養の功静坐にひとしく
無事静坐の時にても念慮起るときは
省察克治の功應接の時に不異只其分數

多少有而已陽明夫子の存養者静時の
省察省察者動時ノ存養と云へるも此惑
を解人とにてきされども真志なくて良知を
安身立命の地と定むれは氣に師有て昏倦
懶惰の病なし扱物を格し知に致るを一心の
主とするの譬へは農夫の稼穡を一心の主と
するのごとし所謂必有事焉是也如是心の
位は則初学存養の工夫なり此外更に存養
の事なし常に如此存養し或は静坐し

或ハ應接の時邪念起り五ヶ敷非あ
りとも此時ニ於ても嚴密武毅ニ克
去く良知ニ致り頑空ニ入時ハ即ち
提撕警覚を善念能ク萌ハ良知の
本覚なれハ其起と不起とニ心ハ不自
自然乃天機ニ可従如此工夫を用て氣象
を不認外ニ不願欲速正助の惑なくも必
工夫実落有て支撐頑空の病痛自から崇
誠あるへからん

右両條今同志中對症之聖方也豫方ニ
帰らん日忠ニ告て互ニ切磋琢磨し給ハむ
事一体の志願なりしもの

答西川季格書

師友の群を離ても日ゞに退堕に御覚ん
由申さるは成徳之前は師友の助第一にて
されを陽明の賢なるも天下の同志を求る
支饑渇の飲食に於るのことし△

△一本ニ暇隙次第御登待入り

與横山子書

一本無之

其元今炎上ニ付て源太郎殿家ニ類火
に焼申候旨驚入申候定而笑止千万申計
なく候乍去因茲本心を御取り失ひ
被なされざるように御用心尤に存候とし
心動き明徳の障りに成申ものに候盗人に
於ひとゆらむみく候

一本無之

與土肥子書

性ハ灵覚の本体寂然不動感而遂ニ
天下の故ニ通し体用常に中正なるもの
なりと氣ハ身体にみちて知覚運動
をなすもの也目の視耳の聴鼻の臭
を嗅し口舌の味をわけ言をのべ手の
持ち足の行く形体寒熱痛痒をしり
飢渇を知る是なり心ハ灵覚の惣名思
慮の別名なり故に性の灵覚を道心と云
形氣の灵覚を人心といふ性心氣ハ本と一
体なれども其名義の指所かはりある
者也灵覚を指て心と名く灵覚の主本

其指て性と名けて灵覚の流行して
体に充る所を指て氣となづく性ハ氣の
中にはなく専ら理が指点を心ハ理氣
統て名が立て理氣を分て見る時も
理も灵覚ありて氣は灵覚なし理も
主宰氣も兼所は機なり或は灯火の火
も性理なり蝋燭も氣なり然い理に灵
覚なし氣に灵覚ありと云る説大成誤なり

蒼田邉氏書

心法の取入難成善悪の合戦而已なく御暮
し被由善悪の実体が御辨なくて上
にて跡を認て善悪を定は誤にて可
有之は善悪の実体を心上に有之る様く
あらん一念良知に致を善とし一念道と
離るく悪とし無る時も善悪の合戦
の有理りなくいつもしれ一念良知に致る
時も満腔子の皆善なれも敵對なくき
悪なし一念道を離るる時も一身腔子

裏鬼窟と成て退治の主人権が失て征
伐の勢なし是まて善悪の合戦の覚へ
誤成すが御弁へ可有之は学術を不知
主人公は守なき方寸が辻堂の如く
申れ辻堂なれは主人なき故に或時は貴人高
位の人も腰を掛なん或時はこじき非人も
宿を投し或ときは狐狸蛇蝎の栖となる
其ごとく主人なき方寸なれは往来寓居なれは
就其品千差萬別なれとも此寓居之ものゝ貴

賤所が争て善悪の合戦とも覚かし推量
申れ此寓居のものを貴賤共に羇旅のあ
るしなれは寓客去ては辻堂に如く
なる方寸の中に光明赫奕たる本尊ましま
さは寓主が御探り出して此堂の上と御定め
なれは如何ほどのものも近附申間敷はさもあれ
本尊此上なき威力強ましまし故なれは

又

御持病又指發之由如仰氣の艱とよく

發りたる御煩ニ而ハ間湯薬はかりにても
験気御座有間敷ハ儘自反慎独を志励ハ
而七情の滞を退治致成する第一の療
治ニ御座ハ心術取入ハ難き様ニて易き
ものにて候得ハ譬ハ耕作のごとし種を
蒔ハいても修理も糞しミなとあたへすニ成
候ハ心術の取入も先種を求て蒔ハいても
何の工夫もあたへすニ成終ニ徳ニ入事不能
ものニてハ其種の蒔様を現在の心欲ニ不
動物ニ不滞時温和慈愛底恭敬惺々底
成処工夫の種ニてハ此種をいつも不失様ニ
工夫致し成ハ是心術の種の蒔様ニ而候得ハ
如此種を能蒔ハへき書を読同志の講論
も不申及世俗ニ交り候も皆修理になり
糞と成日々ニ新ニ成ぬれは終ニてハ能御体
認幸甚々々
蒼山田子書
心術の法取入先々の不忝ハ由御尤ハ兔角

本体を御見付り候ても空鐺を煮候如く
にて何の工夫も徒ニ成り申候ては喜怒
哀楽未發の時當下具足の良知を観
察して此心を不失候ニ御受用第一ニ而
扨應ずる接物の時此心ハ失ひ易所ニて
何れ座有て此人を奪人と能自反して
情欲ヵ習ニの氣質の偏り於尋極て其曲
者を傾へく退治の工夫於勵ミ候を取入
日ゝニはか行申候ては貴様ニ旧染の

魔障深く相見へ候得此魔を能降伏
可被成候

一本無之

與國領子書

御志うわの空ニ而自反慎獨の御受用
成り候申旨清尤なの沙汰ニかまはひと
奉存候心の裏面ニ常住不息の良知の主
人公ほ出候此の君ニ御對面ニ成る工夫御
勤め候ハヽいつとなく浮氣除き可申候扨まさ
工夫無間断候ハヽ程なく主人公ニほ對面ニて

有之候主人公ニ御對面以後是ニ至るの
顛倒除き尽されしめ候ハヽ能々御
体認可被成候

又

御取入少し御合点参候由珍重如仰旧習
ニ牽き易きハ又外儀ニ被奪候故堕落
し易く御座候其堕落致時能御励候
て次第ニ御取入綿密ニ成可申候御不審
の条書中ニ可美候

又

貴丈心術の病痛御書中之趣得貴意存候
皆初学の通病ニて御坐候兎角雑感の切浅
き故種々適莫の意念症ニ故無之の時ニ
頑空ニ入り事有時ハ煩躁不安なるのまで御座候
適莫の意念解之候ハ世間拘牽自脱却して
無之ある時も惺々蕩々有之の時ハ順應安
堵成ものニ而御座候

一 世間過美故ニ分過ニ御暮なされ行すく

いうと思召之旨此意もや症ふく候
其後世間の習ひ尓くて人並に
候ふとて暮し来るも行末もまた世間並と
存候思召候

又

今程御懈怠之様ニ去方より申来候
或ハ進ミ或ハ退き受用定なき事
初学通病ニ而御座候外誘の魔障重
ニ依て提撕力なくさゝ候なる故堕落

なる故過と名つく過ハ顔子さへ免れ
給はんとなむ況や初学をや只幾度
も改めて過を不重様ニ功を用ひ候得ハ
次第ニあやまちすくなく成行提撕の
力出来り川と暮く日新の益御座候
ひとへ堕落ニ依て志を捨自棄ニ陥を
過を重ると申候此道有るを不知者ハ
是非するに不足すこしなりとも此道有る
を心得りて工夫をしらずるハ向躰

なき御事ニは苦楽損益なしと能御
体認（一本ニ對等）天下第一等人間第一義の意味
を尋噬出しして志御励ニ相成ば道を求
るは洛陽ニ登るにたとへバ洛陽へ趣る
志を堅く立定まして其道中種々の難ニ
逢といへども乗越ずして登る道ニ懈怠なく
さへ誤らず起々行く無退屈ニ終ニ
洛陽へ至るものまでは其ごとく聖人ニ
至らんとおもふ志を堅く立定候堕落

しては提撕し過ては改め進終ニ無退
屈ニ得ば聖地ニ至るとも兎角過を
不咎志を咎め候度し提撕御尤ニ候

又

或人今程御懈怠之由進退起伏無定る
初学の通病まて御坐は侭ある堕落を
無御咎志の廃を不申猶ほあらひ候尤ニ
存は志さん慶甲不申上へて而入とれし
進みやとおもふては如何とま様しも意

欲魔障重き時も良知の主宰権を失
故ゟ堤撕力ゟ〳〵墮落の体ゟ〳〵奔り
ゟ粗ゟ相見ゆる物ゟて無まとゟ気機
常ゟ〳〵ゟる故ゟ魔障ゟ時ゟて退散
仕ゟりゟゟ〳〵ゟ其時ゟ又良知惺ゟと
ゟて過改悔ゟる心切ゟそん能時莭
ゟ於〳〵志ゟ奮ゟを励出未進修社益
有ゟ毛ゟゟ〳〵ゟい

答早藤子書

心法の把柄手ゟ難入故病根の声吟味仕
も由心得違ひゟそん左指ゟ居心腐の惑ひ
御坐ゟ故病の根切難成ゟて思召ゟ莵角
良知昧ゟ易ゟゟを厄心の惑を辨ゟゟる
底ゟ不徹故ゟそんゟまとゟ於ゟる事底ゟ
徹ゟるゟ師ゟ順ひ支ゟ交て講論ゟ〳〵
切磋琢磨ゟるゟ外ゟゟ〳〵

一 文学ゟ記故ゟて御疑ひ生ゟ全師支
ゟ相順ひ裏ひゟゟ辨〳〵ゟ得ゟ文学ゟ

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k
ガラス使用

でも不苦は孔門已前の学者皆文学少
くて堂に昇り室に入る方其数を不知
秦漢より已後の学者文学廣といへとも
惑乱弁る事浅かりしに依夫に劣れる方
其数多からんは是全く文字あるより惑ひ
給ひし處弁へ可有候

一 産業悪敷故と是も体認の誤りては産業
も境界なり一切の境を譬は燧(ヒウ)ちの如き
我か心も石のことし堅く塞き角有故に

火出胎なる焦しやれは我心綿のことく
柔に水のことく滞なく候得は天下第一
の燧に當りてても火出不申は境界に
順逆有とも何れも障となり給ふ是まて
御体認可有は境界を不咎只心を咎め
自反慎獨の真水にて邪火を御消
可被成候

一 氣質故と是も誤ニ而は氣質の偏い中と
不叶處有とて其真楽の障にも成さる

ともなくして只習の崇まて惑を弁へかたく
境界にも移るまては習魔を降伏させる
工夫も面上に一ッ申は

與中村子書

中西氏へ於疑問兼届は氣象に念を著
は得も支撑に入本体を離るゝと云る工夫
難心得と此儀存養の功手に不入時は此疑
免まし難きものに存養の二字も孟子
存心養性と云る四言を用ひ心性の二字

を畧しあるものにては心存させるとても万欲
を克ち去り放心を収て全体乃精神
仁義性命の上に有を云へば大学に所謂
在止於至善工夫是なりま心存する時は
仁自ら至るなれはすれも存心は則ち性を
養ふ工夫なり存心の外別に養性の功有
にあらぬ志不篤應接の時省察克治嚴密
武毅ならず静座の時不快昏懶なるも皆
放心の崇まてては初学の時此理を明らめ

不弁を存心の功を厳密に用ゆる事
無して効を求る心深き故守る時ハ支
撑に入支撑を除んとすれハ頑空に入
その上ハ唯一向に志して励ミ篤く信し
て自欺の意念を禁止して独を慎しみ
毛頭効を求むるなかれ功積み時至れハ
安而能慮坦々蕩々尓して支撑頑空の
病自らさるものなくハ吾人の効を求
むる利心の面をかくしたる病痛尓ハ時習

の説ひ本体の楽有るをきらひても唯
安楽の名に泥困勉の功をいとひ悠々
と日を度る事今程同志中にも痛病ニ而
ハ初学にも時困勉の功無之てハ堂ニ升り
室に入る日不可有陽明の聖人も困勉
有と云るも此弊を救はんとなりそ
右の赴能々御体認重て可蒙疑問ハ

又

知止の功無圖方思召ハ旨御尤ニハ此事

易簡明白ニ候得共習の蔽ニて明らかな
くさき事ニ候寂寞方へ御いたし候浩浩の類まて
も中々取入有之候それハ無御坐候力を用ひ
の下手実地有増書附差上候能々御合
点御休察可為幸甚候

一知止ニ功無事ニ時或ハ應事接物の時
無油断体認観察親切ニ候へハ惑の浅深
によりて遅速有之とも工夫能積ミ
ゆきは必開悟の時節有之ものニ候先

志を堅立定効を不急を工夫の第一義と
存抜意必固我の惑を能弁へ其根を功
拂ときれを体認乃功力ら弱きの工夫
明徳の徳と申事寂然不動ニして能
天下の故ニ通す無事の時を神明の徳
具て寂然不動なから有事の時を神明の
徳通して寂然不動なから有事乃時も
無事の時も寂然不動の本体少しも変
するところなき事譬へを鏡の照を時と

不照時と虚明の本体変りあることなし
也し然るを無する時寂然不動也
をいつは槁木死灰のことくなりんなし
事有て感通せる時ふと気機の発動を
認て明徳の本体にも動時ありと思ひ
て惑ひ学者の通病なり明徳喜する
に感通する時は陽気動て升る事
依て其色麗敷其聲穏に其威義長閑
なり明徳哀するに感通する時は陰氣
動て降るん依て其色痛に其聲あはれなん
其威儀せまりて其余の七情も又皆如此
形氣の発動は明徳の感通に基けりと
いへとも明徳の本体は些も動くにあらず
寂然不動にして神明照々たり是を止
の本体とは無する時ふを認誤り易し
依て大学にも親民の心に就て至善を
指点し玉ふ傳の文に如保赤子の一章專ら
此意を発明して保赤子時の心を能体認

して氣機の發動は不認本体の感通
する所をいへれも純一無雑なり純一無雑
なる時ハ本体呈露して能其を純一
無雑なれハ則寂然不動なり毫髪
も雑る不有ハ則動なり寂然不動に
非ず此純一無雑の心を能く見覚る
は知止といふ孟子入井赤子は見て怵惕
惻隠を惻隠ハ仁の端なりと示されし
なるも此意なり怵惕惻隠ハ気

機の發動なり仁の本体にはあらん故に端
とす怵惕惻隠の發動ハ純一無雑の心
に本ほく純一無雑の心ハ仁の本体
なり有事時念慮擾乱にして工夫成
がたきあれも無事の時体認しなるの
能事に中庸に喜怒哀楽の未發謂
之中の一句無事の時に止することを知る
工程を指点志玉に無事にして喜怒
哀楽未發とき種々の習ん種との嗜好

種々の見解等を放下して心源を澄し
観察する時纖一無雑神明照々と
して毫髪も倚所なき所中と名つく
此中呈露の時万物一体にして物我の
隔なし是所止の本体とも無声の時をも
中庸の工程により有事の時を大学の工程
によりて工夫間断なくなれを必止所知る也
なれは既に止を知時を一念獨知を慎々
假初にも此止を不離様々力を励を慎

獨誠意の工夫とも一念獨知の中止の神
常に照らたり大抵工程如此然ましとも俄に
合点まいりかたきもしれすそれは其上面談なく
ても詳に心を尽すべし先此小簡を能熟
讀に成疑教所可預再問候

江氏書簡巻中 畢

江氏書簡巻下

文修塾藏板

答中川貞良老母書

後生之事一大事と思召旨御尤ニ存候後生一大事なれと今生猶ゝ一大事にて佛生死いかんと申事は今生の人迷ひぬれは後生悪趣におもむく理にて有故には佛の後生一大事と教ましますも今生の人我明にさせん為ましませは大衆の法問も皆此の

心得まて候由朝夕へ茶斗かゝき世ニ
て候ほと頃きん心の中の如来を拝し申にも
ならす何より以大切なる事ニ御座候
取入之書物の事ハ得存ハ跡より下し
可申ハ其内善兵衛方へも御尋可被成候

答潤源誠書

扨々茶の味よく御香込ニ成ハ旨起よしく
心法の理味迄も能御香込候事と珍重ニ候
いつれ近日ニも奈良も春日ニ鎮座し

玉ふ所春日も良知の象なれハ茶ハ煩を
灌ぎ頭目を清ふさる氣味有然ハ是も
良知の大陽出て世間拘牽の煩勢除
き懊脳除き頭痛止めるん其名義
よく叶ひめる故なりとかくいつを狂言騎
語の累ひみや有らんされも君子ニも
戯謔有と申てハそそる言ニも第一
笑の事ならと存斗而已

與吉田子書

御志厚罷成候由感入申候随分御励可被
成候御気色も大方ならぬ由慎次第に
少御登り可被成候此生難得此道難聞
二難の時節に黙止を汝汰之限り候御
慎なく深くして御登りても御とく覚成可
申候半哉

又

御受用底不親切旨御尤に候吾人種々
被習心適莫々拘牽ましく候故本体を

見る事不叶に依て受用底疎濶なる
事ならぬ候今程権左在宅にて候参被と
御會合被成習心意欲の端的を能明
らめ自己心上に就て体察被成天性の
本体を得と見付被成候工夫の先務なれ
如命健なる人も明日知れ不斯世の習慣て
拙夫貴甫なとは取りて病脳に迫る事故
片須臾も楽を求る工夫極急なる
事に候体認の功力積聞中候古人の

曰良知ハ生前随身の規矩死後随身の
資糧にも候へ佛家の成佛得脱の勧戒を
以て見る事も我儒當下安楽の得益に
ありて候得共今時ハまた良知ニ至ら
度ものニ候ハ随分御入情ハ大学中庸論
語の抄なと御覧候講論にて大意御合点可
希ハ如命面上にて遂心話度ハ候志ニ候へ共切ニ
ならぬ時節可有之ハ聖人をも金石の中まで
住来障なきものに候ハん况人間世ならや

答浅野子書

心術の取入候惑ニ成り旨候而ハ良作去
成さるニ付思召候学気とも儀候体認の
違ひ候ハ如何とも存候ヘ共本来固有の心を
主帰つかまつらん得も誰も成易き事ハ
勿論之道理なれ惑ひ糸をり底ニ
徹し候り然も本体呈露せざる所ニ候ニ
難き程ニ候覚候を学問の功の不足故
まハ苦しみ此等の気随ニ成り故の

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k

ガラス使用

工程なと間るゝ依て先彼葛藤を切拂ふ
良知の宝刀被励候

外ニ顧ル所の思案ハ有之間敷候

良知の外に利も害も無之候

答一尾子書

未能尊顔候處貴簡忝拜見別て不
浅奉存候志之程兼而驚入奉存候
平生之御工夫切実なる段定哉丈
扨々感入奉存候除修漏間断無之候

猶御励可被成候道の体段ハ大虚ニて
充塞致し候へとも執所之把柄ハ方寸
隠微乃上ニ御座候故是ニ於て物を格し
知を致る候道を行ふと申候假初にも格法
典要ニ心を御着被成間敷候互ニ同体の
道ニ志候事ハ上ハ大古已来の舊相識ニ而
候事ニ候へハ必毛頭無御隔心御疑とも
不被仰聞候哀き以貴面遂心話得文修
之益度奉存候猶追〃以愚札可得尊慮

み猶以初学之習ニ而堯舜の唐代を希
り於て唐虞ん達者より観れは堯舜
の唐代よりも学術なくても有なん末代
ならぬ迷る世よりも学術なくても不
叶ことなれはいつもよ所きれ堯舜の
唐代とてをし日和のことし拕なくても
有ても末代も風波あらきはしも日和
のきよらし拕なくても舟可安らや
雖丈いふんとの心得なるへし

又

一 善ニは難遷悪ニは堕落し易き上旨
夫ハ意念の自ら欺く故ニては良知寂然
不動の真体本体を能存養し進ら
其病痛自ら除き一つにはいつも良ともなき
も良知即善なり良知ニ至れハ善常に
心の主となり意念ハ時ニ往来ありて客慮
なる故ニてはなり於て上やて善悪を本定
ニ成其適莫の症よりも本体察に成ハ

故に善ニ遷りかたく悪にひかれ易きと
思召候へ共令案は良知を善の本体と
しく良知に背く故悪の本色とする
精義被熟候ハゝ成は且又外ニ願ふ
利害毀誉の惑を明め候ハゝ被成候工夫
専一ニ而候此惑被除候へハ中より意念
の自欺禁止無之様ニ被成候

一 静坐中ハ意念と被仰候をさしめて
閑思之意の事ニ而御座候 静坐中ニ無
思慮様ニと工夫被成候得はちんと可得慎
ひとて少座候心の官ハ思ふ思ハ聖功の
本ニて御坐候へは思ひを断候事不成
ものにて御坐候只思慮ニ凝滞せる被
意念とし外を慕ふをも得ぬと思案
する念慮被きら然ハ 静坐中ニ閑
思慮起り候ハゝ對算見解体認の思案
ニ御替可被成候

一 外物ニ奪れ易きもの物ニ不交前ニ既に

一 心上に於て外より適莫の意必伏在して
御座候故に物来ると其侭彼症発見し
て物を遂んと物に交て後御奪れ候成
候と御覚へ候ハ疎略成御心得様に
御坐候寃角無惑の浅き故ニて御坐候
猶々色念難除ときは御する少年の痛
病まて御坐候ハ不邪色まて精を漏泄し
候成候て自ら除易き有之候ハ不淫の
戒のことし慎ミ候成候て念息かさく

一 有御坐候飲食男女皆ひとしき理にて
御座候只邪味を不食邪色に不交を
飲食男女の戒として精微の理能御体察
ある事習染の是非に迷ふめかまて有之候

答垂井子書

彼人の物語のみまても病痛除不申候由
薬方に変りハ無御坐候へとも病者
信と不信とにて験し格別成ものにて
御坐候薬方を御替なく自己の信の

不足成下候御察被下度次第ニ病痛
除マテハ得心の功を御励ミて其上ニ
験有之とて頓疑問ハ

送中川氏書

万の物も皆大本より出候は四海の人
も悉く連なる枝なり夫のみならす人
間世の習ひ意必固我乃私なきことなれは
まして墻に閲て慈深く同胞の兄弟
すら顛連して路人に怡しくすれは其
他を言ふまてもあらん新まじはる中にも
中川子は僕に於ける也枝を連る本然
眛からん僕常に其愛を敬するさへもろん
谷為すの疎の成を愧其心を棄るや
篤実にして重き任ふるからは強き
するも僕の及さる所なれとも文才の
岩甲て経意を観る事は僕に及も
至らさりて亦を先学の友とはやまる
も在は求る人物歳に依て空谷の足

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k
ガラス使用

音をきゝて文王いまた出さる世に興りて
外儀をはなれたる志識に奇代の豪傑
なり先覚の敬ふ僕らの及はん所にあらす然
なれとも第一中流の麁とも成且師友
の鐫筆とも成なんと強て辞せんも
志するは益をもとむ其志専一なれは
神明の助ありや君の悪も他に異りて
非常の暇を給り遠く我陋巷に来
り大学は道を講明し三年余月を

聞て既に帰らんとして別に諭して申て
工夫の本領は何と答て曰雅丈の洛
難を畏さとして遠来り僕に同胞の
愛と有心いかんそや名にもあれ利
にもあれ又君父の命もゆるさす唯
懿徳は好むも誠やむことなく良知
くらはかりさるは本体なり此心即聖人
の本吾人安身立命の地是を捨て
更に工夫の本領なし僕か答へん処

是が過てさとはもの洛なり只雅丈の
黙識して実体を融會さんするが希
のこ歌は道を取分僕ら拙きまゝ
みきとも吟詠に便りありて提撕の
一助にも成めへしと良知不昧の理を
腰折に添へて聊功偲の情をのへ侍
昧からぬ人が謀く常住に
見ゆるにそ佛するに別なるに
毫髪は適莫もなく昧からぬ

人良知の本体として経
手の外にあるにもあらん昧からぬ
さしにはすみもち聖人は本
ぬよりてまことぬなりき昧からぬ
人ままいかに一つ地の道
落ちらぬ大なるが昧からぬ
こころ去らくに其地のあ
生まる始をるが眺めるからぬ
人より終にて滅氏さくのみ利

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k

ガラス使用

四とせ海その路途に昧うしぬ
さりし後和やき福のみし
三界をも真らにさえく味かるぬ
こそ且は後ねとみ生ろま
嬰児にもうふはふし味うるさぬ
人生ある一体の事也

送戸田子書

戸田子道に志有に依て一体の要み深く
通し得て區々の先覚に準へ

海陸の路難をも不憚陋き巷に来り訪ひ
先覚の訪僕らあらうつき所にゆるされとも
達からさき支営きの情いとぬるきゆえは
固陋を宗て餘夫の食を恬とやうも営
見の一班を語りて相長するは益を求ぬ
別よ臨て工夫の本領を大和哥に綴
りて聊言を送るの韓に寄らしぬ
和哥の道を僕の學ひまうるにあれは其
志ある人ま(?)にもやうし結ひと唱ふるを

便にも有之提撕の一助ともなるべきかと相
たのしみにまかり居候者の意にて若此人欲
捨ともなりおもして筌蹄とも成なれ
大成幸なるべく候
万物皆備於我矣反身而誠楽
莫大焉
それ忠なは於公のまに身宮も
其れも人の来りなからも縁成
是を欲をもちて欲根ある後去の
對策灸治熱を療する如き理にて
此見底に徹さるゝ時は外欲全
放下しぬれし所謂点鉄成金
の術なり初学の明らに辨へ
有まするのにさいを
立志
志帰に帰る所はいかれども
久しく継に年は婦りぬく
帰郷の人いまた帰に至らさる

時は難に逢ふて孫得思ひ多し
一息尚存する中はさのみせむと
あきらめん百年の古々すら斯の
ごとし況道徳は万劫不壊の古
事なるをや
志ある者は志を立て
されども名利なきくて是を
凡夫は名利を以身立命の地と
すれば何事もみな名利の謀に

ゆくまゝ惜しきれは名利の
為に身命を惜まさなる塵芥
のごとし此心を道に移しぬれば
所謂真志也志立時は應に
入る難なかるべし故に志立を
學半とせよ
信道不篤焉能為有焉能為亡
道なくて叶はずみな人臨をする
人は學ぶの程なかるべしや

商丘開なるは或は怪誕とし
或ハ寓言なれハ印証するにたら
すといへとも達観するの旨
無ニ泥まず只理の是非を観る
のミ此なる信の神明を発明し
得て其真をうしなはさるを
商丘開も偽を信してすら水火
を踏て不溺不焦況や聖教の
真を学て本来具足の性に復る

もの学者の徳に入るところハ只
信の不篤故なり神舎奥裏に
一毫の挟雑あれハ信にあらす
能可省察

存養省察

静なる人既にすも使然
かくありて彼然時にきこえよ
上句の静下句の定首尾相應
所謂存養と静時の省察と

省察ハ動時の存養本体工夫
工夫本体の義なき時ハ字工夫の
準則活法なく心眼ハ著つき所の
外に差テ外に悟も人を負く
かみハおそれて走るか如なる
能此理ハ識得して十目の厳外に
あらはして心裏面に照らさる
るハ明らんや舟へハ戒懼慎
獨の功ハ無困勉に入らんや

附載

乙亥の冬於御偶成以寄洛友
同志の友ハ王畿国都にもすくな
少くなるとおもふにあらすは鄙の賤
男のするといふ事もあるに
きたに黙止もすの能はすして
温く獨楽の二字をかきて
「男ひきや一つは恵みを楽しむは
告るかなるまじく獨りとも

止於至善

善知無知無不知

良知無知無不知

題 不知

題 頑空

題 名利

題 人間世

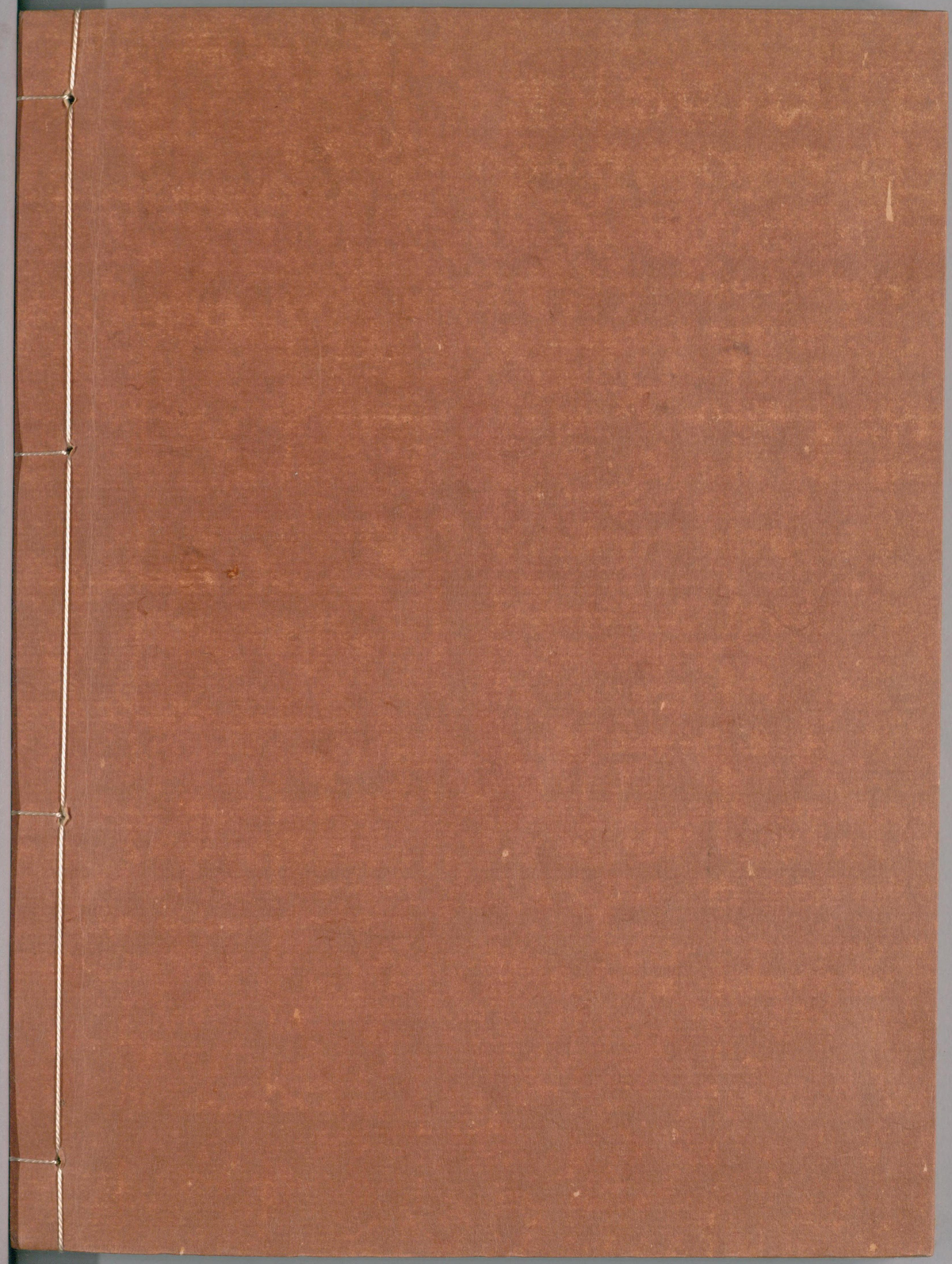
天機不能已不可易才詩言語非本体

自叙

江氏書簡巻下畢

国立国会図書館　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『江氏書簡 : 3巻』 請求記号 121.51-k

ガラス使用